

# 研 究 紀 要

第 12 号

1 9 9 5

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

卷頭写真 埼玉県内出土象嵌遺物の研究（瀧瀬・野中）



1. 広木大町9号墳出土 鐔



2. 広木大町20号墳出土 鐔・鍔



3. 広木大町 2号墳出土 鐸



4. 広木大町 5号墳出土 鞘尻



5. 永明寺古墳出土 鐸・鍼

# 目 次

## 序

方形周溝墓と溝

—方形周溝墓に伴う溝について—

福田 聖 ..... 1

古墳時代集落祭祀の一考察

平岩 俊哉 ..... 17

埼玉県内出土象嵌遺物の研究

—埼玉県の象嵌装太刀—

瀧瀬 芳之・野中 仁 ..... 37

北武藏の古墳時代馬飼養地域

山川 守男 ..... 95

中世地鎮の一様相

—大里郡寄居町末野遺跡例を中心として—

鈴木 孝之 ..... 113

# 古墳時代集落祭祀の一考察

平岩 俊哉

**要旨** 古墳時代の集落祭祀について、集落全体に関わると考えられる例を集め、祭祀のありかたを検討した。いまだ類型を確定するまでは至らないが、祭祀のかたちとして遺物の埋納型、散布（散在）型、集積型、配列型の4つを想定した。そのうち、集積型は、土器の種類では壺や甕が多く、高壺が少ないと、模造品は白玉が多いなどの傾向があり、これは、集落の住民が個々に供獻した結果と考えた。

また、古墳時代の集落では、集落全体に関わるような祭祀跡が必ずしも存在しないことから、自然災害など通常の住居内の祭祀の対応範囲を超えた際に執り行われるものと考えた。

## はじめに

古墳時代の集落祭祀研究は、集落内の各住居跡から出土する石製模造品や土器の分析を通じて進められてきた。近年の資料の増加は著しく、それらは、国立歴史民俗博物館や東日本埋蔵文化財研究会の大部分の資料集にまとめられている。（国立歴史民俗博物館1985年、東日本埋蔵文化財研究会1993年）

ところで、個々の住居跡とは別に、集落内の一画に石製模造品や土器が集中して見つかる例が年々増えている。こうした事例は、集落全体に関わる祭祀跡と考えられている。埼玉県では、この種の遺跡の例が比較的早い時期から見つかり注目されている。川越市女塚II遺跡、同御伊勢原遺跡、深谷市城北遺跡などがそれで、これらは5世紀から6世紀にかけての集落跡である。

本稿では、これら埼玉県の例を中心とし、近県の例も合わせながら、古墳時代中期から後期における集落内祭祀について検討していきたい。

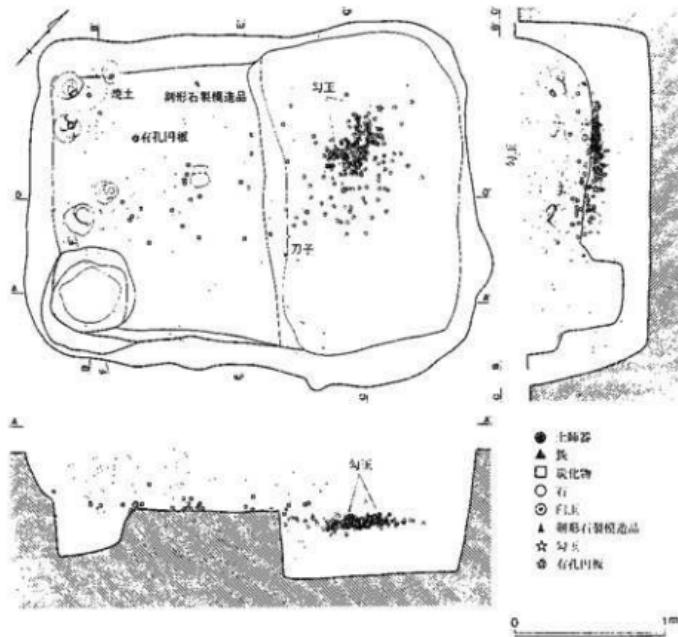
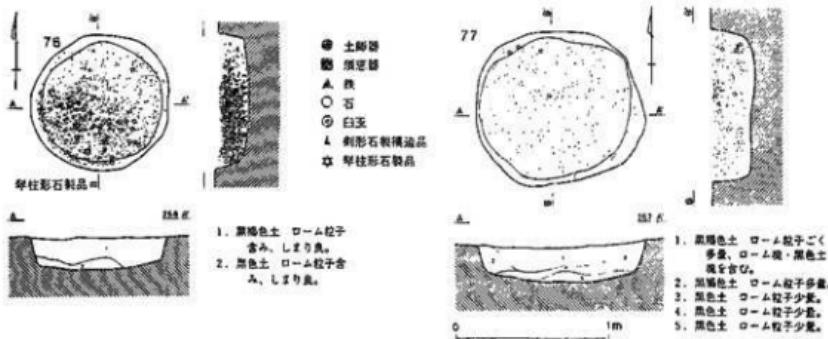
## 1 集落内祭祀の諸例

### (1) 女塚II遺跡（埼玉県川越市・立石1987）

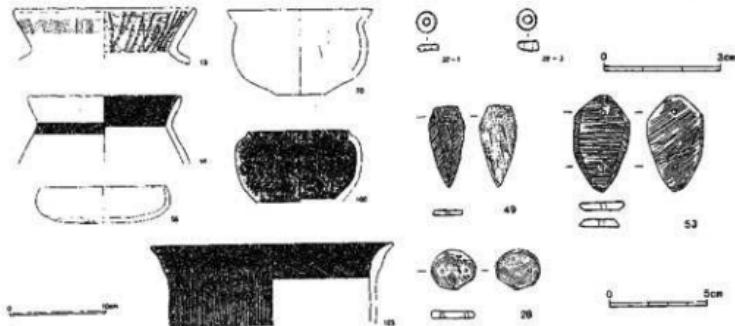
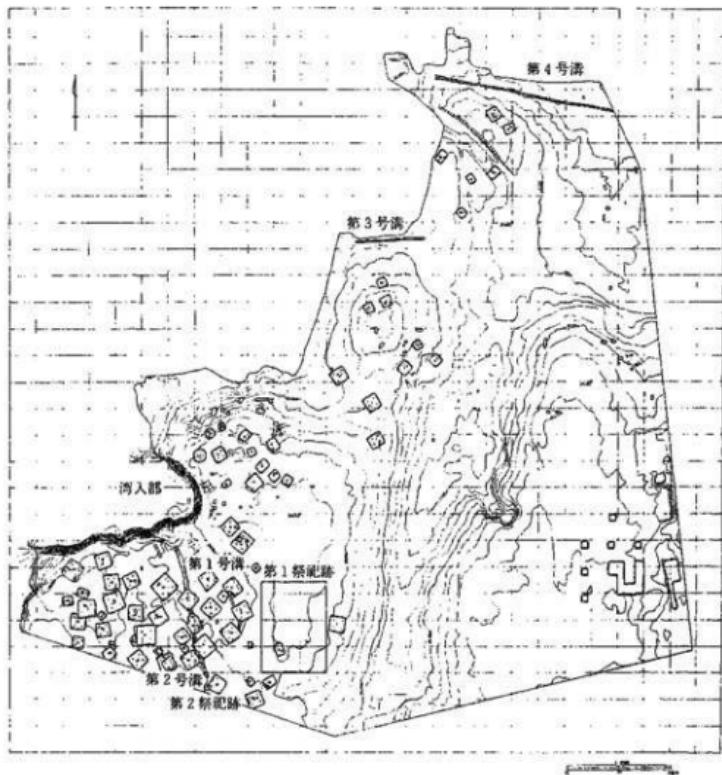
入間川と小畔川に挟まれた標高約28mの台地上に位置する。隣接して御伊勢原遺跡や上組II遺跡があり、相互の関連が考えられている。

女塚II遺跡では、古墳時代の住居跡が14軒見つかっている。そのうち8軒が和泉期である。そして集落内には、石製模造品や土器を出土した和泉期の土壙が6基あり、報告者はその中の2基を「祭祀関係土壙」とし、4基を「土壙墓」と考えている。（註1）

76号土壙は、大きさ0.92m×0.89m、深さ20cmである。琴柱形石製品1、剣形品2、白玉8の他に復元不可能な土器片1,130点あまりが出土している。報告書では、石製模造品と壺2、甕2、小型



第1図 女墳II遺跡76・77祭祀土壙(上)と135号土壙墓(下)(立石1987年より)



第2図 御伊勢原遺跡全体図と1号祭祀跡出土遺物（立石1989年より）

壺1、高壙5、小型壺3、壙2、甑1の各点が図示されている。

77号土壙は、1.12m×1.01mのほぼ円形で、深さは約30cmである。臼玉4点のほか、復元不可能な土器片196点あまりが出土している。報告書では石製模造品と壺6、壺1、高壙2、小型壺1、壙1の各点が図示されている。

2つの土壙ともに底面から上面にかけて遺物が分布している。さらに報告者は、墓と考えられている91号、92号と呼称される土壙の北側に統計で210点に及ぶ白玉分布地点があることから、これを祭祀跡ととらえ、祭祀跡での何等かの儀式・使用土器破碎→円形祭祀土壙へ→一部を土壙墓の中へ散布、という流れを想定し、「この祭祀場を葬送儀礼の場と考えたいのである。」と述べている。そして、隣接する御伊勢原遺跡の例と合わせ、「葬」と「祭」が執行の地点を異にしながら、同一の祭具を用いているとして、「葬祭未分化な「神観念の未発達な状態」」と考えている。

### (2) 御伊勢原遺跡（埼玉県川越市・立石1989）

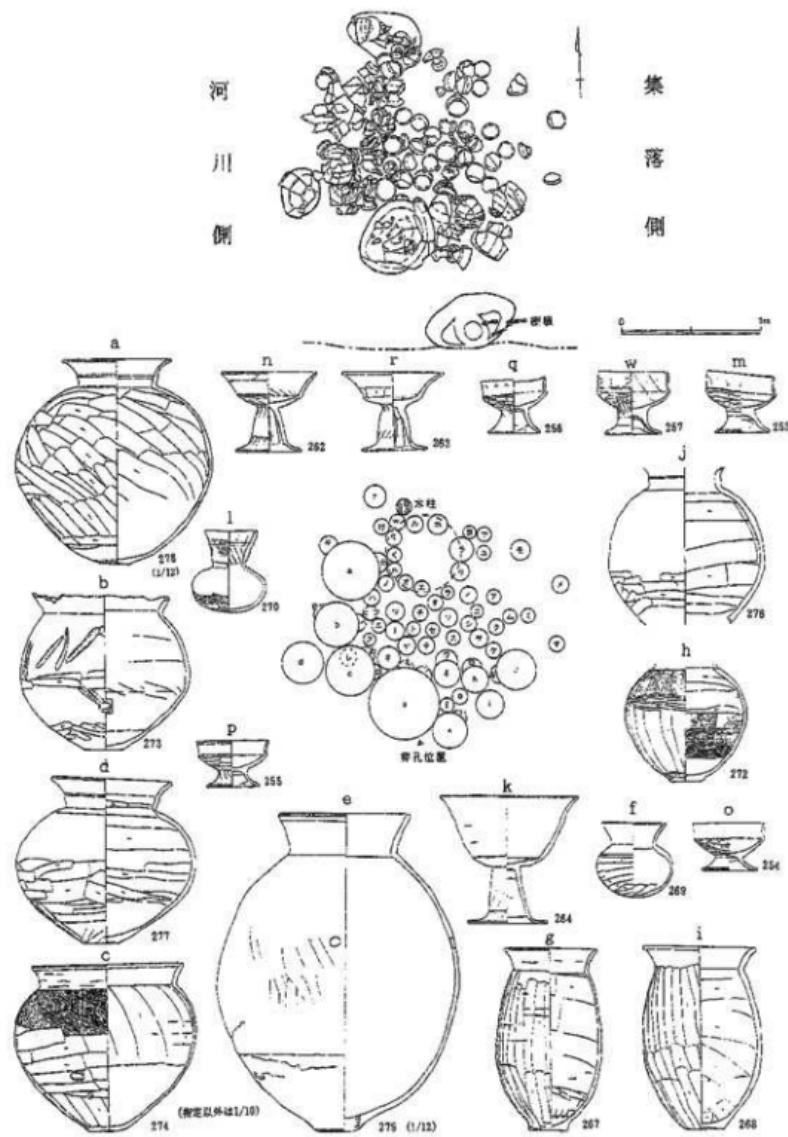
女塚II遺跡の南西約350mの所に位置する集落跡である。古墳時代中期（和泉期）の住居跡が58軒のほか2つの祭祀跡が検出されている。1号祭祀跡は、標高29.24mの遺跡中最も高い所に立地する。復元不可能な土器破片数千点とともに、石製模造品の勾玉7、有孔円板41、劍形品65、臼玉1,999点、不明品4点、珪質シルト岩148gが見つかった。遺物が地表面に散布していた。焼け土や炭化物の分布もなく、報告者は、祭祀造構という名称を用いる一方で、「厳密には祭祀に用いた土器と模造品の捨て場に過ぎない」とし、祭祀自体は、別の場所で行われたことを想定している。2号祭祀跡は、1号祭祀跡の西に約30mほどに位置する。2m四方に土器が分布している。1号祭祀跡と違い接合がある程度可能なことから、報告者は「場合によっては、この地点で破碎されたものか、そのまま放置されたものと考え、第1号祭祀跡とは祭祀の種類が異なるものとみなしたい」と述べ、さらに「石製模造品の臼玉の数は、はっきりしないが、劍形石製模造品2点、勾玉（模造品）1点、有孔円板1点と均一に出土していることから、ある種の祭祀に一度に用いられた模造品のセット関係と數を表しているものと考えることもできる。」としている。

報告書では、土器では、壺10、鉢6、高壙25、壙6、小型壺2、壺17、椀29、甑2の各点と石製模造品関係では、臼玉6点、劍形品2点、勾玉1点、有孔円板1点が図示されている。

### (3) 城北遺跡（埼玉県深谷市・山川1995a・b）

河川の内側に砂層により形成された自然堤防上に位置する。古墳時代後期の住居跡が157軒と祭祀跡5か所のほか、土壙12、溝8、性格不明遺構1、土器集積1が見つかっている。ここでは、集落内にある1号祭祀跡と2号祭祀跡を取り上げることとしたい。

1号祭祀跡は、1.6m×1.8mの範囲に滑石製模造品を伴う土器集積状の遺構である。大型の壺と壺をすえ、その周囲に壺群が積み重ねられている。土器集積周辺の旧地表面では、斑状にFAが見られた。土器の集積は、FA降下前のかなり近い時点での形成されたと考えられている。滑石製模造品は、壺の内外に存在する。壺のあり方には、3種類あることが指摘されている。積み重ねながら壺に傾倒しているほか、壺・壺の安定確保のためかそれらの底部にあてられたり、壺の胴部に密着を図るように差し込まれるなど興味ぶかい点がある。土器群北縁よりの壺の下面からは、焼骨が出土し猪の可能性が強いという。さらに土器集積北側に接して存在するピットの周辺に劍形品



第3図 城北遺跡1号祭祀跡と土器配置復元図（山川1995年aより）

や有孔円板が集中することから、ここに木柱状のものを立て、模造品を吊り下げたと推定される。さらに、土器南側には樹痕があるとして、樹木の傍らでの祭祀が想定されている。

出土遺物は、図化された279点のうち壺が237点と圧倒的に多く、その他椀1、短頸壺5、鉢2、高环19点、甕1、甕3、壠2、盞9である。このうち穿孔された土器が5点あるがこのうちの大型壺は、穿孔方向が集落の方向を向いていることが指摘されている。さらに滑石製模造品は剣形品11、剝片5、有孔円板11、白玉約630点である。その他ガラス玉が出土した。

2号祭祀跡は、河原跡へ向かう傾斜地に位置する。径1mの範囲に壺4点に囲まれるように滑石製品が出土した。旧地表面に放置されたものと推定されている。滑石製品は、刀子形3、斧形1、剝片2がある。

#### (4) 中筋遺跡（群馬県中筋遺跡・大塚他1987、大塚1993、1995）

数次にわたって調査されているが、第2次調査において火山災害によって被災した、5世紀末の集落の様相が明らかとなった。ここでは、2つの祭祀跡が見つかっている。

1号祭祀跡は、東西7.7m×南北4.6mの不正梢円形である。基壇状の高まりが認められ、さらに、中央東寄り2.5m×1.5mの範囲で2～3段の石積みがある。その配石内部に地表面にわずかな盛みを作つて土師器の壺が3点1列に据え置かれていた。壺内部まで火山灰が堆積していたので、それらの上を覆うものはなかったとされる。壺の内部や周囲から稻のプランツオパールが多く検出されているという。その周囲に土師器壺、小壺、高环、甕が置かれている。壺列と北側配石の間には土師器壺が8個体完形で見つかっている。壺や配石内の土から白玉が、配石南から剣形品が出土している。

また、祭祀跡南側中央、配石の河原石南に接してイノシシの歯付顎骨が見つかったことや基壇西端および北端の焼土の存在から、「生けにえ」祭祀における火の使用が想定されている。河原石はその置き台と考えられている。そのほか祭祀基壇内の広範囲にわたって甕や土器の破碎箇所が認められるという。

2号祭祀跡は、東西2.5m×南北1.8mの規模で、礫40数点からなる。中央に唯一の河原石がある他は、亜角礫である。この河原石の前に土師器壺が正位に据え置かれていた。そのやや南に白玉3点とイノシシの歯が出土したことから、これらは「生けにえ」と河原石の置き台とそれぞれ想定されている。西側周辺には、植物質炭化材が分布していたという。

報告者の大塚昌彦氏は、1号祭祀跡を集落全体の共同祭祀場ととらえ、2号祭祀跡を一世帯単位の祭祀跡と考えている。中筋遺跡では、このほかに「堅穴住居の祭祀」や「畑脇の祭祀」、「樹の祭祀」の存在が指摘されている。

#### (5) 黒井峯遺跡（群馬県子持村・洞口1985、石井他1987、石井・梅沢1994）

吾妻川左岸の丘陵性台地上にあり、標高は約250mをはかる。最大2.5mにも及ぶという榛名山二ツ岳から降下した軽石や火山灰の下から5世紀末～6世紀中頃の古墳時代の集落跡が見つかった。1982年の調査で検出された祭祀構造は、直径約1.5mほど皿状に掘り窓め、人頭大よりやや小ぶりの河原石を配した中に、土師器壺を中心に、椀、高环、壠、須恵器壺等の土器が集積されている。報告書では、「本来は、全ての土器が正位置・完形の状態で配置されたものであろう。」とされている。



第4図 中筋遺跡1号祭祀跡（大塚1988年より）

そして出土土器の時間差から長期間、継続した使用が想定されている。

また二次調査では、径約2mのドーナツ形の盛土の中から、土師器壺・壺、須恵器壺、白玉が出士している。これらは、大きさ約30cmの木の根元に祭祀終了後の道具類を埋めたものとされている。

#### (6) マミヤク遺跡（千葉県木更津市・小沢他1989）

東京湾に面した丘陵北向き斜面上に位置する。遺跡の南北全長は350mで南側丘頂部標高約65mに対して、北側尾根先端部は約40mと25mの差がある。

集落内に2つの祭祀跡が検出されている。1号祭祀跡は、約3～4m四方の範囲に土器が細かく破碎され散布していた。そして土器群中に石製模造品や鉄製品がちりばめられた状態で出土した。祭祀終了後の破碎行為が想定されている。

石製模造品類は、鏡形1、有孔円板12、扁平勾玉4、剣形品6、白玉2247、白玉未成品12、その他未成品2、剥片類9、難石2の各点がある。

土器では、土師器は壺が同化可能だったものが100点（完形は2点のみ）、壺は40～50点、甕類14点に比べ高壺は数点の破片である。その他甕1点、手握9点がある。須恵器は、壺は、接合不可能な破片を含めると40点前後の数が想定され、うち20点（蓋9・身11）が同化されている。その他器台1点、甕大11点その他雑形鉄製品16点に加え、実用品の鉄鏃10以上、鎌1、鋸先1の各点と管玉が見つかっている。なお1号祭祀跡の中心部北東25mのところで長さ9.3cmの手持勾玉が見つかり、相互の関連が想定されている。

2号祭祀跡は、1号祭祀跡のほぼ真西にあり、厚い黒色土の堆積層に約3m四方に土器群が散在する。土器は、土師器が壺17（完形の出土なし）甕類8（全形ほぼ復元3点）、壺類3点、混入品とされる高壺1、須恵器は有蓋高壺のつまみ付き蓋2、壺蓋2、高壺脚部片1、壺破片数点で石製模造品は、扁平勾玉1、有孔円板2、白玉13点である。そして鉄鏃1点と管状土錐1、不明土製品1、軽石1の各点がある。またこの遺構では、2か所で焼土瘤（局所的な焚火跡と推定）、貝層（ハマグリ、アサリ、シオフキ主体、マガキ、ツメタガイ等巻貝）の堆積があった。

これら祭祀遺構の年代は、伴出した須恵器から、5世紀後半中心とされている。

#### (7) 日秀西遺跡（千葉県我孫子市・上野他1980）

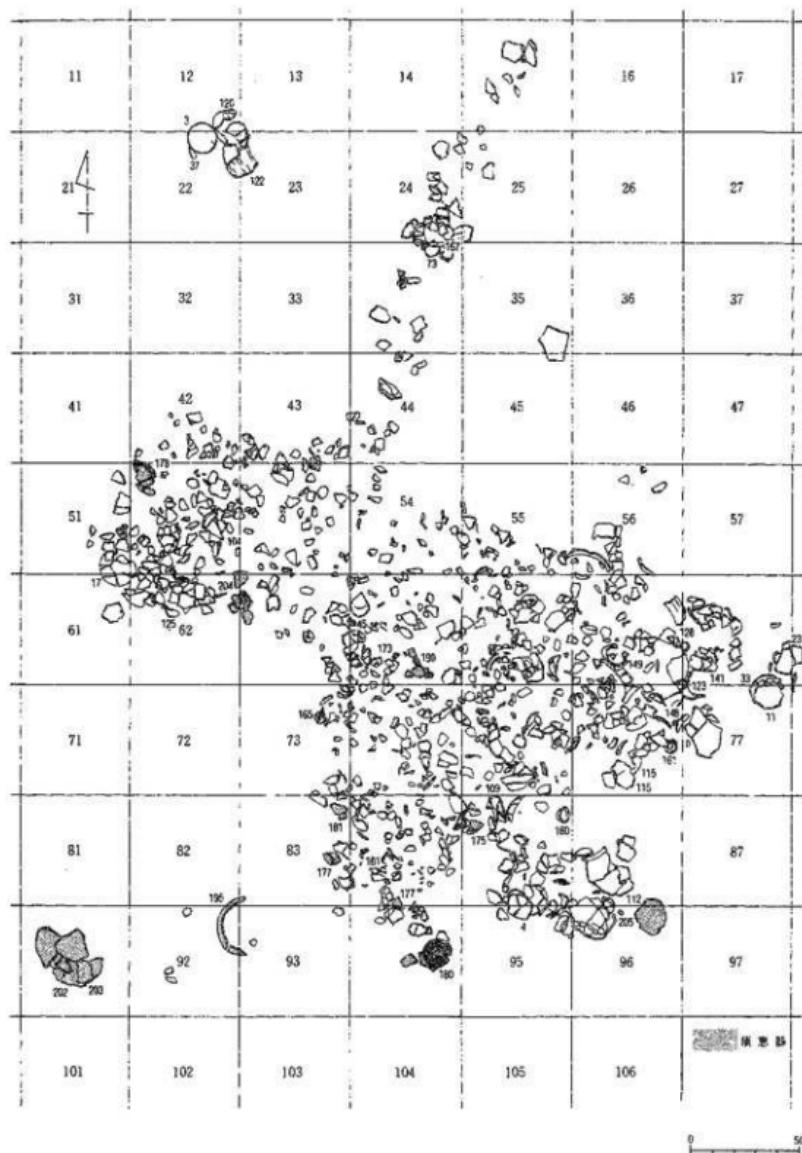
利根川と手賀沼にはさまれた標高約20mの台地上に位置する。古墳時代前期と後期の祭祀跡が1か所ずつ見つかっている。

古墳時代前期（五頭期）の祭祀跡、266遺構は、遺跡西部傾斜地を上りきった地点に土器を一括として並べたような状況で検出された。すなわち北側傾斜面に器台・高壺を置き、南側平坦面に甕等を並べたというものである。この遺構に近接した2基の竪穴住居跡に炉がないことから、報告者は「日常生活の臭をうかがうことはできない」とし、266遺構との関連を想定している。

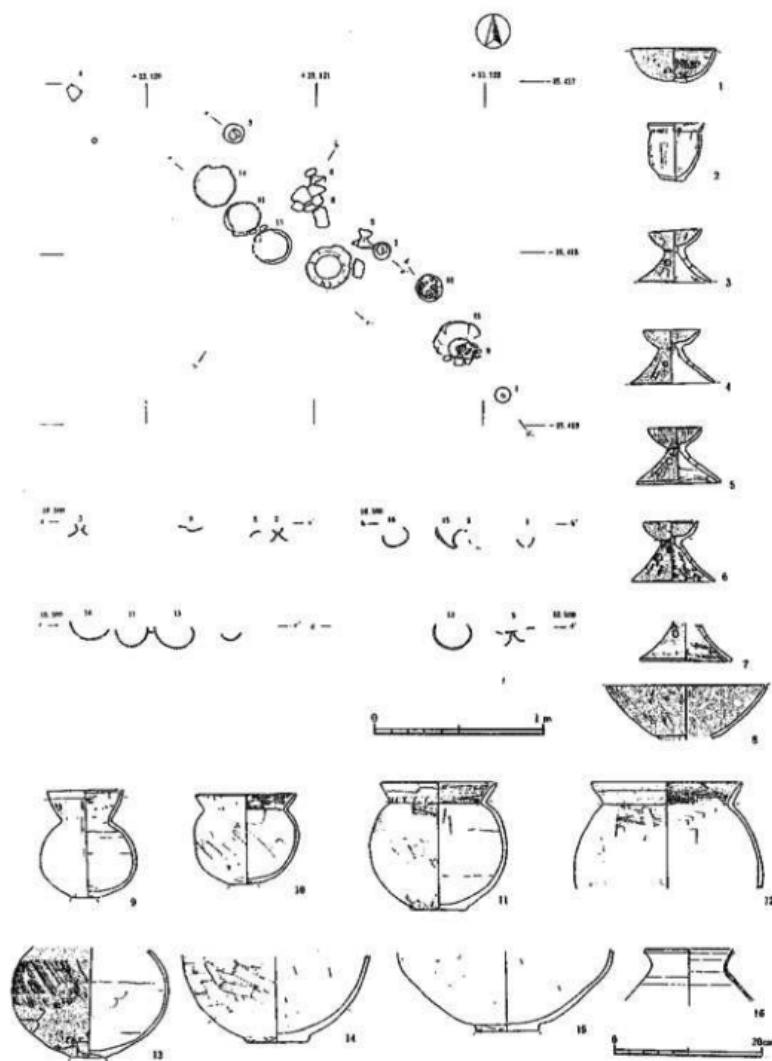
古墳時代後期7世紀の所産とされる271遺構は、小谷にかかる斜面部の黒色土から土器がまとめて出土したものである。鉢形土器が主体で赤彩が多いのが特徴とされる。

#### (8) 上灰毛遺跡（千葉県野田市・飯塚他1991）

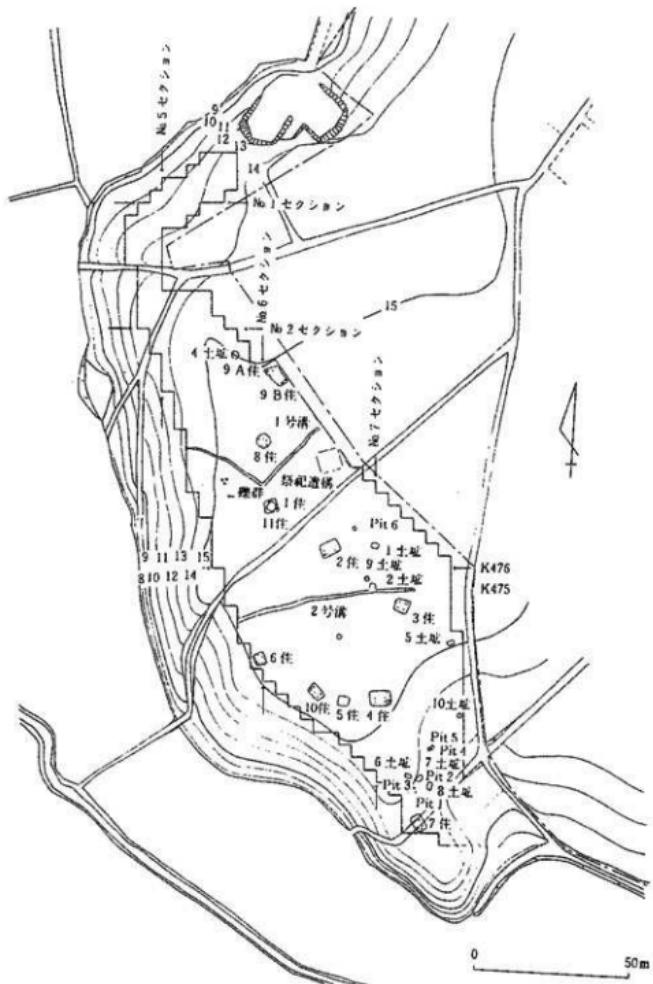
現利根川につながる通称白鷺川の流れる支谷東岸標高約15mに立地する。発掘区北東部で祭祀遺構が検出された。約5m四方に多量の土器や石製模造品が出土した。資料整理作業未了であるが土



第5図 マミヤク遺跡1号祭祀跡（小沢他1989年より）



第6図 日秀西遺跡266号構と出土土器（上野他1980年より）



第7図 上灰毛遺跡全体図（飯塚1991年より）

器は高壺、壺、甕、壺、小型壺、小型甕、石製模造品は管玉3、有孔円板8、勾玉5、劍形品21、白玉5,741点である。

#### (9) 正直A遺跡（福島県郡山市・山内他1994）

阿武隈川と谷田川にはさまれた、標高約246～257mの平坦面に位置する。5世紀中頃から6世紀前半にかけての集落跡と祭祀遺構が見つかった。祭祀跡は、3か所ある。

1号祭祀跡は、埋没谷に沿った南斜面下部に位置し、完形の土師器や石製模造品が多量に出土した。もっとも遺物の出土が集中している地点では、「土師器が重なるように出土している。そして、それと同じ範囲で石製模造品やその未完成品、石製模造品製作時に剥離されたものと考えられる滑石の剥片が散りばめられたように出土している。」報告されている。

出土遺物は、土師器が壺48、高壺2、甕14(完形少)、壺16、短頸甕1、鉢3、小型甕1、小型広口壺1、「超小型甕1」、石製模造品類は、有孔円板単孔16、双孔74、同未完成品3、白玉122、同未完成品1、劍形品38、管状未完成品(白玉原料か)1の各点である。5世紀後半から6世紀初頭の時期とされる。

2号祭祀跡は、調査区外への広がりも想定されているが小規模である。土師器壺6個体分と白玉3の各点が出土した。時期は、6世紀前半とされる。

#### 3号祭祀跡は、土師器壺15と有孔円板1、未完成品1が見つかっている。5世紀中葉とされる。

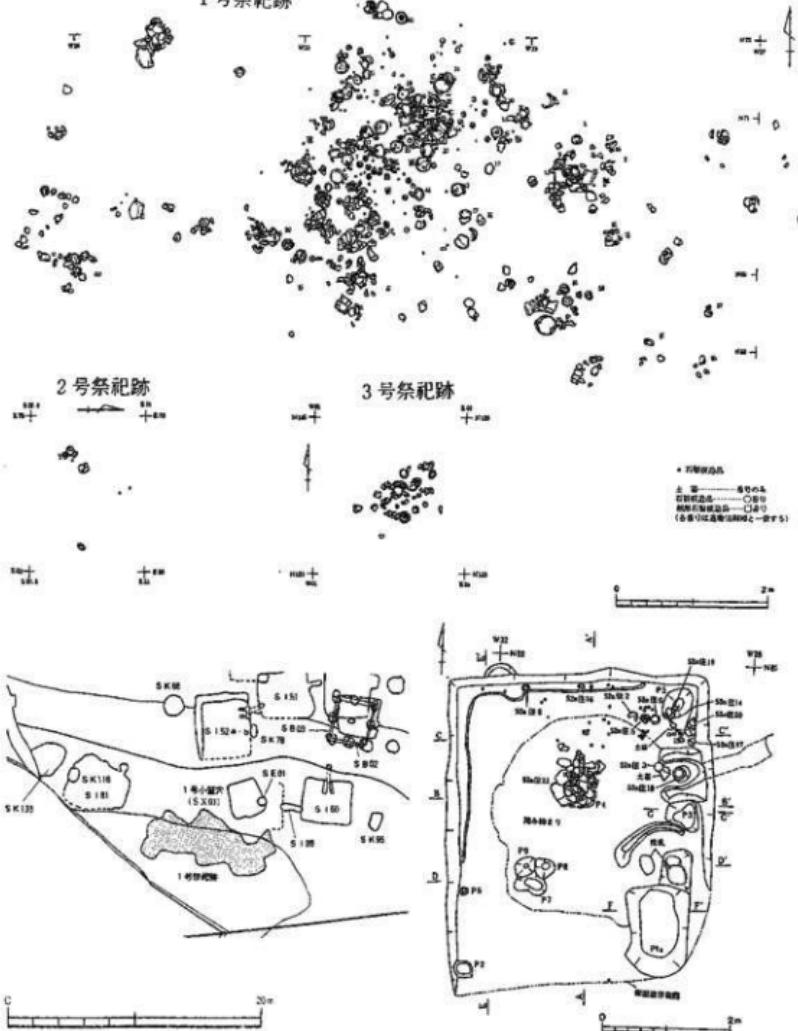
なお正直A遺跡の祭祀遺構は、それぞれの隣接遺構との関連が考察され、祭祀の復原が試みられていて、興味ぶかい。例えばS I 52aと呼称される竪穴住居は拡張された住居で石製模造品の未完成品や滑石剥片の出土から、石製模造品の製作が考えられている。また床面中央から見つかった遺存高49cm、洞部最大径57.8cmの大型甕の内面の器面剥離が水分の影響と想定され、報告者は、「これは、長期間の液体貯蔵に起因する器壁の剥離と推定される。なお床面中央部での検出状況から、最終的には意図的に削られた印象を与える。」と述べている。またSX01と呼称された竪穴は1辺約2～2.6mの小規模なもので、床面が踏みしめられた跡がないとされ、ピットやカマドもなく、SI52aと1号祭祀跡に接まれているという位置関係から、この遺構は、祭祀用具の保管場所とされている。さらに集落内祭祀の実態について、報告者は、大型住居に居住していた首長が執り行い、石製模造品の製作・土師器貯蔵(SX01)→神饌炊飯・神酒醸造(SX01)→儀式→「獻供土器・奉焼幣帛の撒下」(1号祭祀跡)という手順を想定している。

#### (10) 新田遺跡（宮城県多賀城市・高倉他1991）

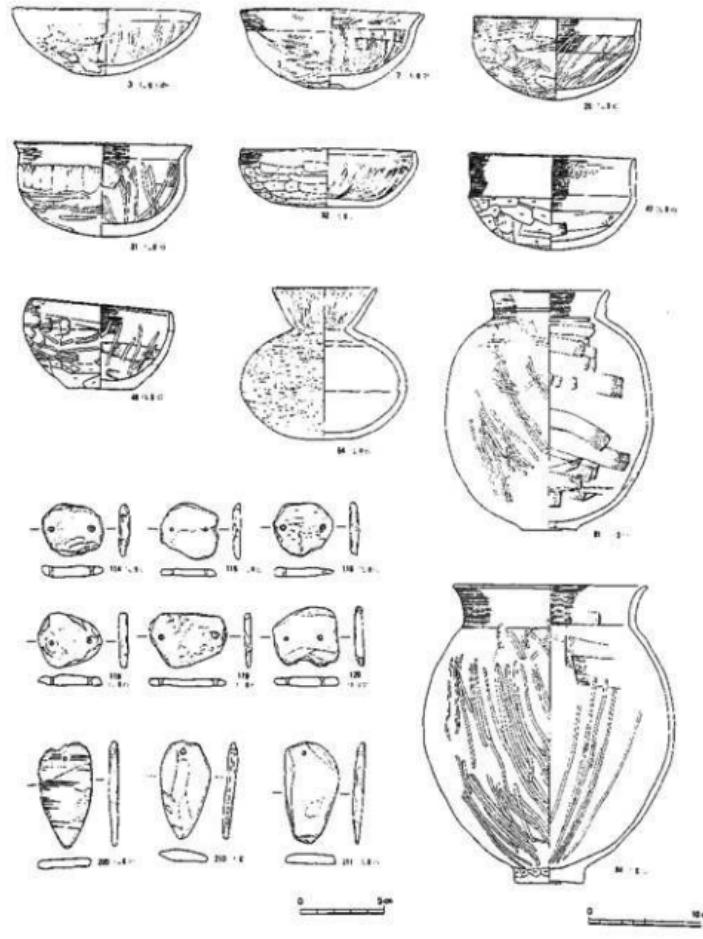
多賀城市的西南端、七北田川の東岸微高地上に位置する。遺跡範囲は、東西0.8cm、南北1.6cmに及ぶといふ。この遺跡の第9次調査で、古墳時代では、中期と後期の竪穴住居跡5軒と祭祀遺構2基、溝1条などが検出された。

祭祀遺構とされるSX1103は、竪穴住居跡の北側平坦面にあり、東西約3.0m、南北約3.5mの範囲である。土師器壺1、高壺8、甕10、甕1の他、周囲から白玉55、有孔円板23、劍形品23などが見つかっている。5世紀前半の時期とされる。もう一つのSX1102は、SX1103の南側にあり、緩やかに窪むU字形の自然地形を利用している。その窪み中央から総点数200点を越える土器が出土し、甕と壺の割合が全体の65%を占めるといふ。その出土は、「大形の甕、壺を中心に置き、その上に小形

1号祭祀跡



第8図 正直A遺跡祭祀跡（上）・1号祭祀跡周辺とSI52a住居跡平面図（山内他1994年一部改変）



-◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□  
 ◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□  
 -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□  
 ◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□ -◎-□

0 3cm 0 3cm

第9図 正直A遺跡祭祀出土遺物（山内他1994年より）

の壺や甕、鉢、杯を重ねたり、周りに配置している。」と報告されている。壺、手捏土器も見つかっている。さらに白玉11、琥珀玉1、劔鍾車1、砥石1の各点が出土している。こちらは、600年前後の時期が考えられている。なおこの遺跡の2次調査では、二つの土壙(SK172、SK190)からは、「土師器の杯・高杯・器台・甕・壺・臼・擂・ミニチュア土器などがまとまって出土」し、4世紀後葉のものとされている。

## 2 集落内祭祀のかたち

ここでは、集落内祭祀のありかたについて、先にとりあげた資料をもとに考えることとしたい。なお、例示した資料は、特に東日本では古墳時代の集落内祭祀の代表的な例と思われるが、今後この種の事例が増加することが考えられる。そこで今回は厳密な「類型」を設定するのではなく、祭祀の「かたち」としておおよその傾向を概観し、若干の私見を述べることとしたい。

埼玉県のほか関東近県を中心に、東北地方まで含め、集落内祭祀の例をまとめてみた。もちろんこの種の遺跡の類例は、今後さらに増加することが期待できよう。

ところで埼玉県内においては、集落全体の祭祀に関わるとされる遺構が他にも注意されている。増田透郎氏は、埼玉県内の祭祀遺跡をまとめる中で集落祭祀の場を集落内、宅内、住居内、カマトに分けており（増田1993）。集落内祭祀の例として円形特殊遺構を検出したミカド遺跡（坂本・鈴木1981）と荒川附遺跡（木戸1992）、柱列群の中に多数の石製模造品を出土した本郷前東遺跡（川口1989）、そして住居跡の存在しない空間に基壇状の高まりが想定され、石製模造品が出土した西富田新田遺跡（菅谷1972）があげられている。また、御伊勢原遺跡2号祭祀跡は、宅内祭祀跡と想定している。円形特殊遺構については、現状ではさらに類例を求める上で検討すべきと考えている。本郷前東遺跡のような例は、長野県下伊那郡鼎町の天伯B遺跡（大沢他1975）などに求められるかもしれないが、同様に類例の増加を待ちたいと考える。西富田遺跡例は実際の遺構の状態がはっきりとしないが、中筋遺跡の例もある。しかし現状では、集落内祭祀において普遍的に基壇状の施設があるとは言いたいだろう。

古墳時代の集落内祭祀について、比較的早い時期に検討を試みたものに、静岡県日詰遺跡を取りあげた鈴木敏弘氏の仕事がある。（鈴木1978年a・b）この遺跡については、報告書のほかに、最近では佐藤達雄氏がとりあげている（佐藤1995年）。日詰遺跡では、5世紀から6世紀にかけての祭祀遺構（土器集積）が19か所見つかっている。佐藤氏は、これらを砾群と高壇その他甕、壺、手捏土器の有無、模造品の有無と種類（土製、石製）さらに遺物の出土状況から「散在型」と「集中型」に分類した後、日詰遺跡の祭祀遺構の変遷を軸として、静岡県内の祭祀形態の変遷を述べている。この中では、集落内に特定の場が河原石や土器群により、区画設定された時期を古墳時代祭祀の成立期と位置づけている。この時期は5世紀中葉から後半とされる。ただ19か所の祭祀遺構が、住居群とは別の場所で連絡と続くありさまは、例示した遺跡の集落内祭祀の状況とは異なるものと考える。したがって今回の検討資料の中からは、除外した。（註2）

さて、今回事例として取り上げた遺跡での集落内祭祀遺構は、大別すると、遺物の埋納型（土壙型）、散布（散在）型、集積型、配列型の4つになろう。この点については、先の佐藤氏の分類と共に

通するものがある。この中で土壙などに土器等を埋めるやりかたは、古墳時代前期に多く見られるよう、古墳時代の中期から後期には、あまり見られないようである。石野博信氏が提唱したいわゆる「縦向型祭祀」(石野1991)のような状況は、女堀II遺跡の祭祀土壙から想定できない。調査者の考るるように、儀式に使用した土器や石製模造品を入れるという祭祀の過程の一部として考るか、単なる廃棄を考えるべきであろう。ただ忍井峯遺跡の二次調査で見つかったドーナツ状の盛土に土器や模造品が埋められた例は、別に注意すべきであろう。

次に、御伊勢原遺跡やマミヤク遺跡、上火毛遺跡に見られるような遺物の散布(散在)が見られる遺構が、問題となってくる。御伊勢原遺跡の報告者は、1号祭祀跡について、集落形成の初期段階から最終まで継続したと考え、全ての器種を含むが傾向として「壺、甕類は少なく、高杯、碗、杯類が多いように感じた。」と述べ、赤彩土器やミニチュア土器、手型土器の出土量が特に多いということも無いという。そして、1号祭祀跡の性格について、「本来、祭祀跡ではなく、厳密には祭祀に用いた土器と模造品の捨て場に過ぎない」と述べている。これに対し、石野氏は、祭祀用具が一括埋納されていたとらえている。そして、「祭場そのものは明らかではないが、古墳祭祀と同様の滑石製模造品を多量に使用する村落祭祀が行われていたことは確かである。5世紀に普及する多種多量の専用祭具を奉獻する祭祀が古墳以外の場で盛んに行われていたことを示す事例である。」と述べている(石野1991)。御伊勢原遺跡の場合は、遺物の出土状況は、散布あるいは堆積が妥当であり、「埋納」とするには、無理があるようと思われる。しかし集落の一一角に、しかも最高所に遺物の分布が見られることはただ単に廃棄したのではなく、一定の意図をもって行われたと考えるべきである。したがって1号祭祀跡は、破碎した土器や模造品をその場に散布することを目的として形成されたもの、すなわち集落内祭祀の段階の一つでありその意味では「祭場」と考えたい。2号祭祀跡については、土器の接合が可能ということから1号祭祀跡と祭祀の種類が異なる可能性が考えられているが、そうだとすると後述するように、土器集積型の部類に入る可能性もある。

マミヤク遺跡の場合も御伊勢原遺跡と基本的には同様であろう。1号祭祀跡の土器の器種構成は土師器では、壺の量が多く甕がそれに次ぐが、高杯が少ないことが指摘されている。須恵器についても壺や甕に比べ、高杯が少ない。こうした点も土器集積型に類似するように思われる。ただ、鐵や鉄製品をはじめとして豊富な出土資料の内容から考えると、一般集落と同列に扱えない面もある。2号祭祀跡でも壺、甕の数が多く、高杯が少ない。ただ2か所の焚火跡や貝塚の存在が気になるところであるが、これが地域的な特色なのか、遺構の性格にかかわるのかは、今後の課題といふ。

一方土器集積型は、代表的例として城北遺跡をあげることができよう。城北遺跡の調査報告者である山川守男氏は、この種の遺構を土器集積型祭祀跡と呼び、群馬県箕郷町谷ツ遺跡(群馬県立歴史博物館1995)、同町下芝五反田II遺跡(松田1995)や上井出遺跡(清水1992年)を類例としてあげている。先述のように城北遺跡の1号祭祀跡では、土器の配置が復原されている。くり返しになるが、それによると甕や壺をすべて、それらの周囲に壺が重ねられている。滑石製模造品については、北側ピット周辺の劍形品と有孔円板はピットに樹立された木柱や樹枝に吊り下げられ、白玉は、「小型土器群の集積と並行して壺内に入れられたり、振り撒かれたようである。」とされている。この遺

構の壺の中にには、壺や甕の安定を図るよう底部にあてられたり、差し込まれているものがあるが、これらは、土器集積をそのままの形で維持するためのものとは、考えられないだろうか。また1号祭祀跡は、6世紀初頭の一時期に形成され、その後そのままにされていた。古墳時代の集落で、集落全体にかかわるとされるような祭祀跡が必ずあるとは言えず、また存在しても一遺跡内での数は多くはない。こうした集落内祭祀は特別なことと言わなければならない。こうしたことから集落全体にかかわると考えられる祭祀の特殊性が予想される。城北遺跡では、榛名山ニツ岳の火山活動との関連が想定されている。(山川1995年b)全ての集落内祭祀にこうした考え方があてはまるかどうかは、今後なお検討しなければならない。しかし自然災害など人々の生活に重大な影響をおよぼす事柄が、通常の住居内祭祀での対応範囲を超えることは、充分に考えられよう。黒井峯遺跡のように継続した使用が考えられる場合は、火山噴火などを含め、自然の驚異に対する恐れが強かったことを意味するのかもしれない。ただ正直A遺跡や新田遺跡の場合の祭祀対象については、さらに検討を要する。

ところで土器集積型の祭祀跡では、土器では甕や壺の占める割合が多く、高壺が少ないことが目立っている。石製模造品では、白玉が多い。このことについては推測の域を出ないのだが、祭祀執行にあたり、中核をなす甕の周りに積み上げられた壺や白玉は、数の多さから、集落内の豊穴住居の住民が個別に持ち寄り、供獻したと考えたい。すなわち、甕をえつけるなど祭祀の中核と考えられる行為(祭場の設定)については別としても集落内の住民全体が主体的に祭祀に参加する形を想定したいのである。出土遺物が住居内で使用されたものと遜色無いのは、こうした事情によるものではないだろうか。そうしたことによって集落内の危機をのりこえようとしたものと考えている。

土器配列型は、集積型の小規模なものを考えられるだろう。古墳時代前期の例だが、千葉県日秀西遺跡の266遺構や、群馬県中筋遺跡の例が該当するであろう。やはり集落内の全員もしくは、世帯単位での祭祀形態(供獻)として考えられよう。

さて、これら4つの祭祀のかたちは、互いにどのような関係にあるのだろうか。土器集積型や配列型は、土器類がすえおかれた状態そのままであることがあるから、先述のようにあるいは、祭祀終了後もその場所に「存在」することが大切だったのでなかろうか。祭祀跡を集落内的一角に置き続けることで「信仰」のかたちを残したのかもしれない。その意味では、散布型も同様である。ただし定形化した「施設」を設けるまでには至っていないものである。一方埋納型は、祭祀執行後外からは見えない状態にするのだから、祭祀を執行した土壤はその時点で完結する。他の祭祀と比べると継続性は少なく、一過性のものといえよう。ただ、地点を変えて土壤に祭祀遺物を埋納するという行為が重なれば別である。その意味で、女塚II遺跡の不明の多数の上塙群の時期や性格が問題となってくる。祭祀の手順などについては、先に取りあげた資料の報告者が様々な復原や意味づけを行っているが、その当否については、判断がむずかしい。ただ残っている祭祀遺構の状態を出发点として考えていくことが重要だと考える。そうした作業の積み重ねが4つの祭祀のかたちの相違を解明することになろう。祭祀を執行した後に使用した祭具を処分、集積した場所か、あるいは一連の祭祀行為の痕跡として散布型を考えることもできよう。また、集積型は、祭祀行為の最終的な姿としてとらえることもできよう。

### 3 集落内祭祀研究の課題

以上限られた資料に基づき、古墳時代の集落内祭祀について概観し、私見を述べてきた。厖大な資料から得られる情報からほんの一部分しかふれることができなかつた。今後も資料の収集につとめ、検討を重ねていきたいと考えている。さて古墳時代の集落内祭祀研究について留意しておきたいことがある。それは、石製模造品の保有の問題である。桜井秀雄氏は、この問題について「豪族層から民衆層まであらゆるレベルにまで「石製模造品」という共通な祭祀用具を用いた統一的な祭祀形態が認められるということが理解されるのである。」と述べている（桜井1990）。桜井氏は、さらに別稿で、石製模造品の出土場所について改めて言及し、極めて多岐にわたることから「統一的な祭祀形態」を強調し、その観点から、住居跡から出土した石製模造品の再検討の必要性を述べている。その上で桜井氏は、後神泉氏の論考を高く評価している（桜井1995）。

後神泉氏は、同じ遺跡の中で石製模造品を多く出土するグループとそうでないグループの存在に着目し、石製模造品の供給は、集落間の「譲り渡し」ではなく、在地首長層が祭祀面での支配強化を意図して配布したものであり、集落に対して「限定的かつ選択的」に供給をしていたと考えている。（後神1993）。そうだとすれば、今回取り上げたような集落内祭祀跡との関係が問題となってくる。集落内の祭祀跡は全ての遺跡で発見されるわけではないので、こうした遺構での祭祀執行に同様の論理が存在したかどうか検討しなければならないし、特に土器集積型の坏の多さの原因についても考えなければならない。集落内祭祀について、どの程度支配強化といった側面が追究できるのかが重要な課題といえよう。

### おわりに

本稿は、祭祀という復原しにくい内容について、少しでも実態に迫ろうと考えたものである。多くの調査担当者・報告者の努力で世に送りだされた調査成果を曲解しているとすれば、全て筆者の責任であり、至らない点は、今後の課題としたい。執筆にあたっては、山川守男氏や福田聖氏、村田健二の各氏をはじめとして、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の方々には大変お世話になりました。文末ではありますが、衷心より感謝いたします。

本稿は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団平成6年度研究助成の成果である。

### 註

- 1 女塚II遺跡では、石製模造品や土器が出土した土壙6基の性格を祭祀関係と墓の2通りに分けている。長方形の91号（大きさ3.70m×0.88m、深さ26.0cm）、92号（大きさ2.30m×0.67m、深さ45.0cm）、135号（大きさ2.97m×2.17m）、橢円形の136号（大きさ2.47×1.45m、深さ45.0cm）は、土壙墓であるとしている。その根拠について報告者は、それぞれの土壙断面で、柱の痕跡は確認できなかったとしながら「遺物の分布を観ると埋葬のため棺を安置した後、ある程度土を土壙内に入れた段階で、土器の破片や臼瓦をばらまくような行為があつたことがわかるとともに、棺が腐朽したのち、その上にまかれていた土器片や臼瓦が崩壊し空洞化した部分に落ち込んだと解釈できるから」だとしている。

これに対し、坂本和俊氏は、古墳埋葬施設から出土する半の低い劍形品、有孔円板が見られる一方で、木棺の痕跡やガラス玉、刀、鐵鋸等墓に通有のものが無く、古墳に副葬されない層の墓としては少ないと理由をあげ、「脂肪酸分析などの手続を経ていない以上、直ちにこれを墓と認めるわけには行かない。」と述べている。(坂本和俊「女塚II遺跡」「古墳時代の祭祀」東日本埋蔵文化財研究会1993年)

報告者が私と考えた上記4土壙は、76号や77号に比べ規模も大きく、出土遺物も豊富である。たとえば135号土壙は二段に掘り込まれテラス状を呈するものである。ここからは、壺や高环、小型壺や碗などの完形品を含む土器や劍形品、有孔円板や白玉などの石製模造品や刀子が出土している。遺物の出土状況を見ると、土壙底面よりある程度上がった位置に分布しており、報告者の考るような、稍安置→土入れ→土器片・石製模造品散布の過程を想定できないとは、言いきれない。したがって現状では、土壙墓とする報告者の考えを尊重したい。ただし坂本氏の言われるよに脂肪酸分析等科学分析の実施や、類例の検討により、この種遺構の性格をより詳しく把握できよう。

なお、女塚II遺跡では、時期不明の集積土壙が5基、時期不明土壙が218基あり、報告者は、「ほとんどの土壙から出土遺物がなく性格も不明である。特に5世紀代の集落の一級構成員の墓の存在が気になるところである。」と述べている。この点についても今後の課題として残されている。

- 2 日筋遺跡の祭祀対象については山の神とする鈴木氏や遺跡南側を流れる背野川の氾濫に関連する川を対象とした祭祀を考える亀井正道氏に対し、佐藤氏は、集落内での祭祀を想定している。私は、本文で述べたように、古墳時代の集落内祭祀の普遍的な形と考えるには、難しいと考えるので、鈴木氏や亀井氏の説に沿って考えていくべきだと思っている。中でも亀井氏の説がより妥当性を持つのではないかと考えている。(亀井正道「河神信仰の考古学的考察」『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集』上巻 吉川弘文館 1983年)

#### 引用・参考文献

- 小沢 洋他 「小浜遺跡群 マミヤク遺跡」君津市考古資料刊行会 1989年  
飯塚博和 「古代の神まつり 古墳時代中期の野出地方ー【野田市史研究】第2号 野田市 1991年  
石井克己・梅沢重昭 「黒井峰遺跡」読売新聞社 1994年  
石井克己他 「子持村史」上巻 子持村 1987年  
石野博信 「総論」「古墳時代の研究3 生活と祭祀」雄山閣 1991年  
上野純司他 「山秀西遺跡発掘調査報告書」千葉県文化財センター 1980年  
大沢和夫他 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」一下伊那郡燕町その2—日本道路公团名古屋建設局・長野県教育委員会 1975年  
大塚昌彦他 「中筋遺跡 第2次発掘調査概要報告書」波川市教育委員会 1988年  
大塚昌彦 「中筋遺跡」「古墳時代の祭祀」東日本埋蔵文化財研究会 1993年  
大塚昌彦 「火山灰で埋まった集落の祭祀(中筋遺跡)」「遺跡報告会 群馬の祭祀遺跡」資料 群馬県立歴史博物館 1995年  
『古墳時代の祭祀』第2回東日本埋蔵文化財研究会 1993年  
川口 譲 「木郷前東遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第78集 1989年  
木戸春夫 「荒川附遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第112集 1992年  
『共同研究古代の祭祀と信仰』国立歴史民俗博物館研究報告 第7集 1985年  
後神 泰 「5~6世紀における集落祭祀の一様相」「古代文化」第45巻8号 1993年  
坂本和俊・鈴木徳雄他 「金座遺跡」「鬼塚遺跡」児玉町文化財調査報告書第2集 1981年  
桜井秀雄 「古墳時代の祭祀をめぐるー考察」「信濃」第42巻第1号 1990年  
桜井秀雄 「石製模造品研究の現在」「長野県考古学会誌」76 長野県考古学会 1995年  
佐藤達雄 「古墳時代集落における祭祀の変遷ー静岡県日躰遺跡中心にー」「地域と考古学」向坂鋼二先生還暦記念論集 同刊行会 1994年  
清水 豊 「群馬県上井出遺跡出土の祭祀遺物」「群馬県考古学手帳」3 群馬県土器観会 1992年

- 菅谷浩之 「西富田新田発掘調査概要」本庄市教育委員会 1972年
- 鈴木敏弘 「集落内祭祀の意義」「神道考古学講座」第3巻 月報 1978年 a
- 鈴木敏弘 「南伊豆下賀茂日説遺跡発掘調査報告」南伊豆町教育委員会 1978年 b
- 高倉敏明 「新田遺跡」「多賀城市史」第4巻 考古資料 多賀城市 1991年
- 立石盛詞 「女塚II・女塚原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第68号 1987年
- 立石盛詞 「御伊勢原」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第79集 1989年
- 洞口正史 「黒井峯遺跡I」子持村教育委員会 1985年
- 松田 騰 「下芝五反田II遺跡」「平成7年度調査遺跡発表会」資料 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995年
- 増田逸朗 「埼玉県の祭祀遺跡」「古墳時代の祭祀」東日本埋蔵文化財研究会 1993年
- 山内幹夫他 「母焼地区遺跡発掘調査報告書 正点A遺跡」福島県教育委員会 1994年
- 山川守男 「城北遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第150集 1995年 a
- 山川守男 「埼玉県城北遺跡の土器集積型祭祀跡・古墳時代後期の集落内祭祀」『祭祀考古』第4号 祭祀考古学会  
1995年 b

## 研究紀要 第12号

1996

平成8年3月25日印刷

平成8年3月31日発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社